

江戸の地勢について語ります

江戸は徳川家康によって武家政権の都になりました。家康は、小田原の北条氏滅亡後に豊臣秀吉によってそれまでの駿河（静岡県）、遠江（静岡県）、三河（愛知県東部）、甲斐（山梨県）から関東に領地替えを言い渡され、江戸の地に拠点を築くように指示されました。

秀吉没後、家康が政権を握っても家康はそのまま江戸を政権の拠点とし、幕府を開きます。

先ずこの江戸と言う名前の由来についてまず語りましょう。

語音からの説。「蝦夷（えぞ）」がなまって江戸説。古代も古い時代この地は未だ蝦夷が支配していた土地でした。もう一つは「えごま」がなまって江戸説。この地はえごまが多く生えていた土地でした。この二つの説は今は少数説です。

語意からの説です。“川が海に臨む入江”の意味から江戸説。「江」は入江、「戸」は港又は戸口の意味から出ています。現在この説を取る人が多いようです。

江戸の住所です。江戸時代は全国どこからも江戸と言えば江戸ですが、正確には武蔵国むさしのこく 豊島郡としまぐん（としまごうり）江戸郷えどごうです。古代からの行政名です。

豊島郡の名残りが東京都豊島区です。

武蔵国は古代21郡で、現在の東京都（隅田川の西側まで足立区を含む）、埼玉県及び神奈川県の川崎市と横浜市3分の2位（東側）の地域です。

東京都は江戸時代の武蔵国の多摩郡、荏原郡、豊島郡、足立郡の南端部及び葛飾郡の西側の葛西地区です。葛西は隅田川の東側です。葛西は中世までは下総国（現千葉県北部）の葛飾郡に属していましたが、江戸時代に江戸に編入されました。

郡の名前は今でも残っていますね。多摩は東京の西で多摩川や西多摩郡。荏原は東京の南で戦前は荏原区がありましたが現在は品川区荏原があります。荏原警察署もあります。豊島は東京の北に現在豊島区があります。足立区は東京の東で足立区があります。

次に江戸時代の江戸の範囲です。江戸御府内と言いました。

今日の東京都区内の中心地域ですがもう少し詳しく言います。(別紙江戸の範囲略図をご参照ください)

東の限界は江東区・墨田区(現荒川)より西、北の限界は板橋区上板橋、北区王子、足立区北千住より南まで、西の限界は新宿区あたりと目黒区下目黒あたりから東まで、南の限界は品川区南品川(目黒川河口)あたりより北までとなります。よって整理しますと江戸御府内は中央区、千代田区、台東区、江東区、墨田区、荒川区、文京区、豊島区、港区、新宿区、渋谷区、江戸川区、そして足立区は南部の北千住、北区は王子まで、板橋区の南部、目黒区は下目黒辺りまでとなります。

従って東京都区内あっても周辺の江戸川区、葛飾区、練馬区、杉並区、世田谷区、中野区、大田区は江戸ではなく、そして区内以外の地である武蔵野市、町田市、八王子市等も江戸御府内には含みません。

実は江戸の範囲は行政上はつきりしない所があります。徳川幕府はこれとは別に江戸町奉行の支配地を別に定めました。この地域は上記の範囲よりいくらか狭くなります。

東京又は近郊にお住まい又は住んだことがある方でないと分かりにくいと思います。大雑把にいつて現在の皇居を中心に東京都区内11区と5区の一部が江戸に入ります(東京は23区あります)。江戸城(皇居)を中心にして東西10キロメートル、南北7キロメートル位でしょう。因みに平安京は南北5、2キロメートル、東西4、5キロメートルです。

この江戸の地域を古代から今日の東京までを遡ってどのような地勢であるのか、あったのかを見てみましょう。地勢は自然に又人工的に変りました。

今から2万年前は世界は氷河期の内の氷期で最も寒い時期です。氷結の海域が多かったので海が後退しており、東京湾は全て陸地でした。

その後の今から1万年前に氷期は終わり、温かい時期である間氷期(後氷期)になります。この頃が縄文前期です。海は陸に前進し、海面は現在の3メートル以上高く、現在の東京湾どころか、東京都、埼玉県はだいたい海でした。だいたいと言いますのは、台地である。多摩丘陵(東京都)、武蔵野台地(東京都)、大宮台地(埼玉県)、土浦台地(茨城県)や下総台地(千葉県)は陸として残りました。この台地の海際に縄文人が暮らしたのです。貝塚があるので分かります。(別紙縄文時代の関東地方の陸と海略図を参照下さい)

縄文後期から弥生時代（2500年前）には、又気候が寒くなり始めました。氷期に向い始めました。海は徐々に引いて行きます。関東平野は陸の部分が多くなり始めました。

関東平野（武蔵国）は台地以外は標高が低く、東京湾（江戸湾）から武蔵国へは遠浅の海ですので、海は引いたとはいえ、弥生時代の初期は潮が満ちれば埼玉県あたりまで海で（埼玉県川口で標高4メートル位）、潮が引いても浅草あたりが海岸線となる時期が続き、それから更に陸地化が進み今日の東京の地勢に近い状態になって行きました。

上記のような地勢ですので、江戸及びその周辺は5世紀位までは人が住む地域が限定され、雑木林や葦が生い茂る未開の原野がほとんどの地でした。武蔵国では、東西の移動は多くの場所が潮が満ちたら海になってしまいますので、通交が不便で、道なき道でした。

古代の古くは京都から武蔵国向かう道は現在の東海道ではなく、東山道でした。東海道は三浦半島から舟に乗って上総国（千葉県南部）に続くのです。後は下総国（千葉県北部）から常陸国（茨城県）で終点です。

当時、武蔵野国へは、東山道で信濃国（長野県）から上野国（群馬県）を経て武蔵国に入ります。そして国府（東京都府中市）、江戸や下総（千葉県）に向います。

武蔵野国の開拓は、7世紀の半ばに朝鮮半島の百濟（くだら）の難民を入植させるなどして開拓を進めました。

武蔵野国の陸地化が安定し原野も切り開かれて来ましたので、朝廷は771年（宝亀2年）に武蔵野国へのルートを変更しました。武蔵国を東山道から切り離し、東海道の道を変更し、三浦半島から千葉への海上ルートではなく相模国（神奈川県）から武蔵国（神奈川・江戸）への陸上ルートとしました。これがそれ以降今日まで続く江戸（東京）に入る東海道ルートです。

しかし11世紀の初めのころ（平安時代中頃）の武蔵国（東京）の風景をつづった「^{さらしなにつき}更級日記」によりますと、「今は武蔵国になりぬ・・・・・・・・^{あし}葦・萩のみ高く^お生ひて、馬に乗りて、弓持たる末見えぬまで高く^お生ひしげりて、中を分け行くに竹芝（*）といふ寺あり」と記述されています。

現代語訳しますと、“武蔵野国に入りました。遠くを進む馬上の侍の弓の先端

が見えないほど高い蘆や萩が生い茂っている中を分け入って進みますと、竹芝（*）という寺がありました。”（*）東京都港区の済海寺のことといわれています）

ですから未だ11世紀初めになっても現東京地方は（武蔵国）は大木もなく葦と萩が生い茂る原野がほとんどであったことがうかがわれます。馬上の侍の弓の先が見えないほどの高さですので、葦が2メートル以上の高さがあったのでしょう。

尚、「更級日記」の作者は、当時上総介（千葉県の実質知事）であった父の菅原孝票^{たかすえ}の娘で、父が任期満了で京に帰る時に従った時に記した道中記を含む日記です。

その頃は上述のようにもう東海道は上総国（千葉県）より海路三浦半島に向かう旧東海道ではなく、武蔵野国（東京）を経由して相模国に至る新ルートになっていました・

武蔵国は平安時代の末から鎌倉時代には武士団の開發があり、江戸では江戸氏が有名で拠点^{たかすえ}を麴町の台地（現千代田区内の北）置きました。

室町時代は太田道灌が桜田の台地に江戸城を築き拠点としました。以後江戸城は上杉、北条氏の持ち城になり北条氏滅亡後徳川家康の本拠地となりました。

家康は江戸の地勢を人工的に変えます。工事は三代家光の時代まで続きます。これにつきましては別の機会に語ることにいたします。

2015年3月28日

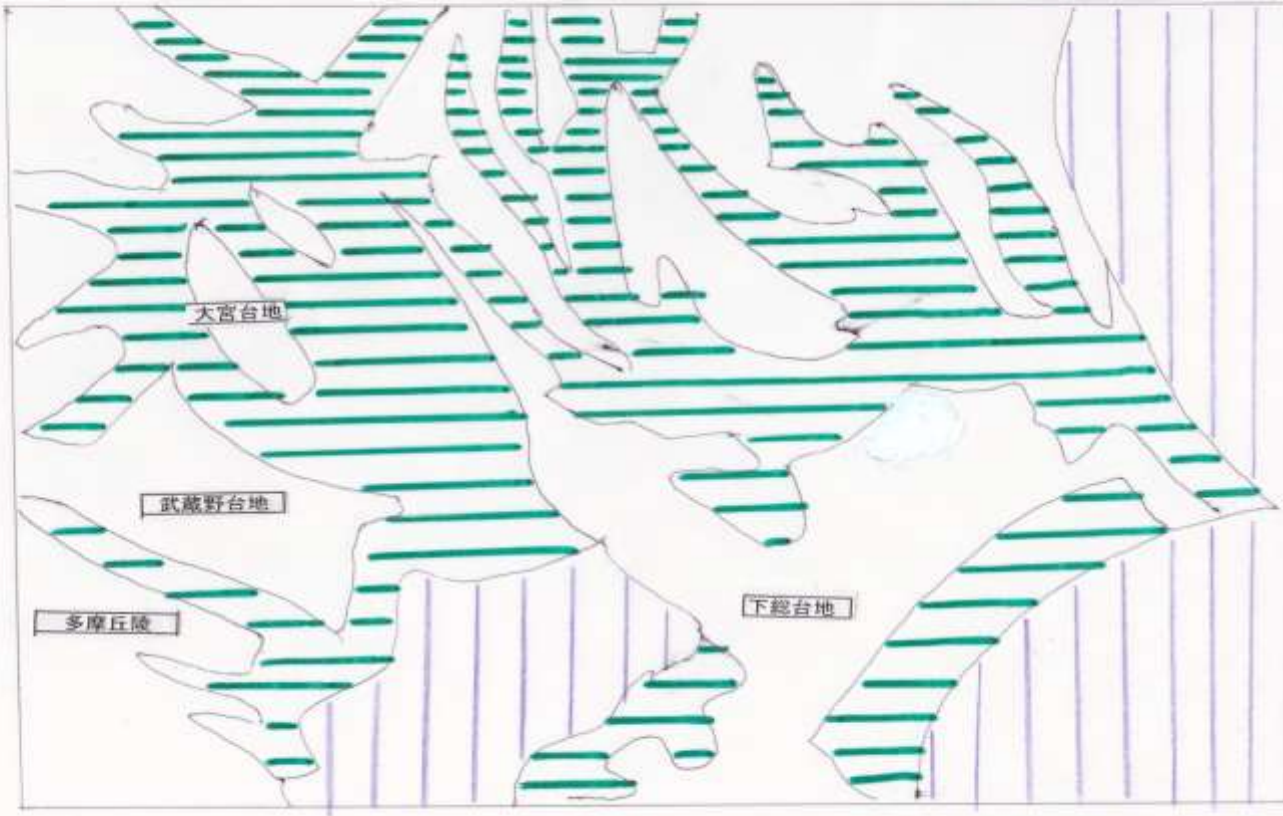
梅 一声



- 江戸御府内
- 江戸時代の海岸線
- 現在の海と川
- JR

縄文時代の関東地方の陸と海

- 陸地
- 縄文時代はここも海
- 現在も縄文時代も海



陸地

縄文時代はここも海

現在も縄文時代も海